

# 三右衛門の罪

芥川龍之介

青空文庫



文政四年の師走である。加賀の宰相治修の家に知行六百石の馬廻り役を勤める細井三右衛門と云う侍は相役衣笠太兵衛の次男数馬と云う若者を打ち果した。それも果し合いをしたのではない。ある夜の戌の上刻頃、数馬は南の馬場の下に、謡の会から帰つて来る三右衛門を闇打ちに打ち果そうとし、反つて三右衛門に斬り伏せられたのである。

この始末を聞いた治修は三右衛門を目通りへ召すように命じた。命じたのは必ずしも偶然ではない。第一に治修は聡明の主である。聡明の主だけに何ごとによらず、家来任せといふことをしない。みずからある判断を下し、みずからその実行を命じないうち、は心を安んじないと云う風である。治修はある時二人の鷹匠にそれぞれみずから賞罰を与えた。これは治修の事を処する面目の一端を語っているから、大略を下に抜き書して見よう。

「ある時石川郡市川村の青田へ丹頂の鶴群れ下れるよし、御鳥見役より御鷹部屋へ御注進になり、若年寄より直接言上に及びければ、上様には御満悦に思召され、翌朝卯の刻御供揃い相済み、市川村へ御成りあり。鷹には公儀より御拝領の

富士司の大逸物を始め、大鷹二基、二基を撃えさせ給う。富士司の御鷹匠は相本  
 喜左衛門と云うものなりしが、其日は上様御自身に富士司を合さんとし給うに、雨上り  
 の畦道のことなれば、思わず御足もとの狂いしとたん、御鷹はそれで空中に飛び揚り、  
 丹頂も俄かに飛び去りぬ。この様を見たる喜左衛門は一時の怒に我を忘れ、この野郎、何  
 をしやがったと罵りけるが、たちまち御前なりしに心づき、冷汗背を沾すと共に、蹲  
 踞してお手打ちを待ち居りしに、上様には大きに笑わせられ、予の誤じや、ゆるせと御  
 意あり。なお喜左衛門の忠直なるに感じ給い、御帰城の後は新地百石に御召し出  
 しの上、組外れに御差加えに相成り、御鷹部屋御用掛に被成給いしとぞ。  
 「その後富士司の御鷹は柳瀬清八の掛りとなりしに、一時病み鳥となりしことあり。あ  
 る日上様清八を召され、富士司の病はと被仰し時、すでに快癒の後なりしかば、すき  
 と全治、ただいまでは人をも把り兼ねませぬと申し上げし所、清八の利口をや憎ませ給い  
 けん、夫は一段、さらば人を把らせて見よと御意あり。清八は爾来やむを得ず、己が息子  
 清太郎の天額にたたき餌小ごめ餌などを載せ置き、朝夕富士司を合せければ、鷹も  
 次第に人の天額へ舞い下る事を覚えこみぬ。清八は取り敢ず御鷹匠小頭より、人を把る  
 よしを言上しけるに、そは面白からん、明日南の馬場へ赴き、茶坊主大場重

玄を把らせて見よと御沙汰あり。辰の刻頃より馬場へ出御、大場重玄をまん中に立たせ、清八、鷹をと御意ありしかば、清八はここぞと富士司を放つに、鷹はたちまち真一文字に重玄の天額をかい掴みぬ。清八は得たりと勇みをなしつつ、鬨揚げ（鬨トハ鳥ノ肝きもヲ云）のさすが小刀をせきしゆ隻手に引抜き、重玄を刺さんと飛びかかりしに、上様には柳瀬、何をすると御意あり。清八はこの御意をも恐れず、御鷹の獲物はかかり次第、鬨を揚げねばなりませんと、なおも重玄を刺さんとせし所へ、上様にはたちまち震怒し給い、筒を持ってと御意あるや否や、日頃御鍛錬の御手銃にて、即座に清八を射殺し給う。「  
 第二に治修は三右衛門へ、ふだんから特に目をかけている。嘗乱心者を取り抑えた際に、三右衛門ほか一人の侍は二人とも額に傷を受けた。しかも一人は眉間のあたりを、三右衛門は左の横鬢を紫色に腫れ上らせたのである。治修はこの二人を召し、神妙の至りと云う褒美を与えた。それから「どうじゃ、痛むか？」と尋ねた。すると一人は「難有い仕合せ、幸い傷は痛みませぬ」と答えた。が、三右衛門は苦にがしそうに、「かほどの傷も痛まなければ、活きているとは申されませぬ」と答えた。爾来治修は三右衛門を正直者だと思っている。あの男はとにかく巧言は云わぬ、頼もしいやつだと思っ  
 こう云う治修は今度のこと、自身こう云う三右衛門に仔細を尋ねて見るよりほかに近

途かみちはないと信じていた。

仰せを蒙こうむった三右衛門は恐る恐る御前ごぜんへ伺候しこうした。しかし悪びれた気色けしきなどは見えない。色の浅黒い、筋肉の引き緊しまった、多少疝癰かんぺきのあるらしい顔には決心の影さえ仄ほのめいている。治修はまずこう尋ねた。

「三右衛門、数馬かずまはそちに闇打ちをしかけたそうじゃな。すると何かそちに対し、意趣いしゆを含んで居ったものと見える。何に意趣を含んだのじゃ？」

「何に意趣を含みましたか、しかとしたことはわかりませぬ。」  
治修はちよいと考えた後のち、念を押すように尋ね直した。

「何もそちには覚えはないか？」

「覚えと申すほどのことはございませぬ。しかしあるいはああ云うことを怨うらまれたかと思うことはございします。」

「何じゃ、それは？」

「四日ほど前のことでございします。御指南番ごしなはん 山本小左衛門殿やまもとこざえもんどのの道場に納会のうかいの試合がございしました。その節わたくしは小左衛門殿の代りに行司ぎょうじの役を勤めました。もつとも目録もくろく以下のものの勝負だけを見届けたのでございします。数馬の試合を致した時にも、

行司はやはりわたくしでございました。」

「数馬の相手は誰がなつたな？」

「御側役平田喜太夫殿の総領、多門と申すものでございました。」

「その試合に数馬は負けたのじやな？」

「さようでございます。多門は小手を一本に面を二本とりました。数馬は一本もとらずにしまいました。つまり三本勝負の上には見苦しい負けかたを致したのでございます。それゆえあるいは行司のわたくしに意趣を含んだかもわかりませぬ。」

「すると数馬はそちの行司に依怙があると思うたのじやな？」

「さようでございます。わたくしは依怙は致しませぬ。依怙を致す訣もございませぬ。」

しかし数馬は依怙のあるように疑つたかとも思います。」

「日頃はどうじや？ そちは何か数馬を相手に口論でも致した覚えはないか？」

「口論などを致したことはございませぬ。ただ……」

三右衛門はちよつと云い澀んだ。もつとも云おうか云うまいかとためらっている気色とは見えない。一応云うことの順序か何か考えているらしい面持ちである。治修は顔を和げたまま、静かに三右衛門の話し出すのを待った。三右衛門は間もなく話し出し

た。

「ただこう云うことがございました。試合の前日でございます。数馬は突然わたくしに先刻の無礼を詫わびました。しかし先刻の無礼と申すのは一体何のことなのか、とんとわからぬのでございます。また何かと尋ねて見ても、数馬は苦笑にがわらいを致すよりほかに返事を致さぬのでございます。わたくしはやむを得ませぬゆえ、無礼をされた覚えもなければ詫わびられる覚えもなおさらないと、こう数馬に答えました。すると数馬も得心とくしんしたように、では思違いだったかも知れぬ、どうか心にかけれぬ様にと、今度は素直に申しました。その時はもう苦笑いよりは北叟ほくそえ笑んでいたことも覚えて居ります。」

「何をまた数馬は思い違えたのじや？」

「それはわたくしにもわかり兼ねます。が、いずれ取るにも足らぬ些細ささいのことだったのでございます。——そのほかは何もございませぬ。」

そこにまた短い沈黙があった。

「ではどうじやな、数馬の気質は？ 疑い深いとでも思ったことはないか？」

「疑い深い気質とは思いません。どちらかと申せば若者らしい、何ごとも色あら露らわすのを恥じぬ、——その代りに多少激し易い気質だったかと思えます。」

三右衛門はちよつと言葉を切り、さらに言葉をと云うよりは、吐息といきをするようにつけ加えた。

「その上あの多門との試合は大事の試合でございました。」

「大事の試合とはどう云う訣わけじゃ？」

「数馬は切り紙きでござりまする。しかしあの試合に勝って居りましたら、目録さずかを授さづつたはずでござりまする。もつともこれは多門にもせよ、同じ羽目はめになつて居りました。数馬と多門とは同門のうちでも、ちようど腕前うでまえの伯仲はくちゆうした相弟子あいでしだったのでござりまする。」

治修はるながはしばらく黙つたなり、何か考かんがえているらしかつた。が、急に氣を変えたように、今度は三右衛門の数馬かずまを殺した当夜のことへ問を移した。

「数馬は確かに馬場の下にそちを待つていたのじゃな？」

「多分はさようかと思ひます。その夜は急に雪になりましたゆえ、わたくしは傘かさをかざしながら、御馬場おまばの下を通りかかりました。ちようどまた伴とももつれず、雨着あまぎもつけずに参つたのでござりまする。すると風音かぜおとの高まるが早いか、左から雪がしまいて参りました。わたくしは咄嗟とつぎに半開きの傘を斜めに左へ廻しました。数馬はその途端とたんに斬きりこみましたゆえ、わたくしへは手傷も負おわせず、傘ばかり斬つたのでござりまする。」

「声もかけずに斬つて参つたか？」

「かけなかつたように思いまする。」

「その時には相手を何と思つた？」

「何と思う余裕よゆうもござりませぬ。わたくしは傘を斬られると同時に、思わず右へ飛びすきました。足駄あしだももうその時には脱ぬいで居つたようございます。と、二にの太刀たちが参りました。二の太刀はわたくしの羽織の袖そでを五寸ばかり斬り裂きました。わたくしはまた飛びすきりながら、抜き打ちに相手を払いました。数馬の脾腹ひばらを斬られたのはこの刹那せつなだつたと思ひます。相手は何か申しました。………」

「何かとは？」

「何と申したかはわかりませぬ。ただ何か烈しい中に声を出したのでございます。わたくしはその時にはつきりと数馬だなど思ひました。」

「それは何か申した声に聞き覚えがあつたと申すのじやな？」

「いえ、左様ではございませぬ。」

「ではなぜ数馬と悟さとつたのじや？」

治修はじつと三右衛門を眺めた。三右衛門は何とも答えずにいる。治修はもう一度うなが促す

ように、同じ言葉を繰り返した。が、今度も三右衛門は袴へ目を落したきり、容易に口を開こうともしない。

「三右衛門、なぜじゃ？」

治修はいつか別人のように、威厳のある態度に変わっていた。この態度を急変するのは治修の慣用手段の一つである。三右衛門はやはり目を伏せたまま、やっと嚙んでいた口を開いた。しかしその口を洩れた言葉は「なぜ」に対する答ではない。意外にも甚だ悄然とした、罪を謝する言葉である。

「あたら御役に立つ侍を一人、刀の錆に致したのは三右衛門の罪でございませぬ。」

治修はちよつと眉をひそめた。が、目は不相変厳かに三右衛門の顔に注がれている。

三右衛門はさらに言葉を続けた。

「数馬の意趣を含んだのはもつとも次第でございませぬ。わたくしは行司を勤めた時に、依怙の振舞いを致しました。」

治修はいよいよ眉をひそめた。

「そちは最前は依怙は致さぬ、致す訣もないと申したようじゃが、……」

「そのことは今も変りませぬ。」

三右衛門は一言<sup>ひとこと</sup>ずつ考えながら、述<sup>じゆつ</sup>懐<sup>かい</sup>するように話し続けた。

「わたくしの依怙<sup>たもん</sup>と申すのはそう云うことではございませぬ。ことさらに数馬を負かしたいとか、多門<sup>たもん</sup>を勝たせたいとかと思わなかつたことは申し上げた通りでございませぬ。しかし何もそればかりでは、依怙<sup>たもん</sup>がなかつたとは申されませぬ。わたくしは一体多門よりも数馬に望み<sup>しよく</sup>を囑<sup>まか</sup>して居りました。多門の芸はこせついで居ります。いかに卑怯<sup>ひきよう</sup>なことをしても、ただ勝ちさえ致せば好<sup>よ</sup>いと、勝負ばかり心がける邪道<sup>じやどう</sup>の芸でございませぬ。数馬の芸はそのように卑<sup>いや</sup>しいものではございませぬ。どこまでも真<sup>ま</sup>とにも敵を迎える正道<sup>せいどう</sup>の芸でございませぬ。わたくしはもう二三年致せば、多門はどうてい数馬の上<sup>じょう</sup>達<sup>たつ</sup>に及ぶまいとさえ思つて居りました。……」

「その数馬をなぜ負かしたのじゃ？」

「さあ、そこでございませぬ。わたくしは確かに多門よりも数馬を勝たしたいと思つて居りました。しかしわたくしは行司でございませぬ。行司はたといいかなる時にも、私曲<sup>しきよく</sup>を抛<sup>なげ</sup>たねばなりませぬ。一たび二人<sup>ふたり</sup>の竹刀<sup>しんたい</sup>の間<sup>あいだ</sup>へ、扇<sup>あふぎ</sup>を持って立つた上は、天道に従わねばなりませぬ。わたくしはこう思いましたゆえ、多門と数馬との立ち合う時にも公平ばかりを心がけました。けれどもただいま申し上げた通り、わたくしは数馬に勝たせたいと思

つて居るのでございませう。云わばわたくしの心の秤は数馬に傾いて居るのでございませう。わたくしはこの心の秤を平らに致したい一心から、自然と多門の皿の上へ錘を加えることになりました。しかも後に考えれば、加え過ぎたのでございませう。多門には寛に失した代りに、数馬には厳に過ぎたのでございませう。」

三右衛門はまた言葉を切った。が、治修は黙然と耳を傾けているばかりだった。

「二人は正眼に構えたまま、どちらからも最初にしかけずに居りました。その内に多門は隙を見たのか、数馬の面を取ろうと致しました。しかし数馬は気合いをかけながら、鮮かにそれを切り返しました。同時にまた多門の小手を打ちました。わたくしの依怙の致しはじめはこの刹那でございませう。わたくしは確かにその一本は数馬の勝だと思ひました。が、勝だと思ふや否や、いや、竹刀の当りかたは弱かつたかも知れぬと思ひました。この二度目の考えはわたくしの決断を鈍らせました。わたくしはどうとう数馬の上へ、当然挙げるはずの扇を挙げずにしまつたのでございませう。二人はまたしばらくの間、正眼の睨み合いを続けて居りました。すると今度は数馬から多門の小手へしかけました。多門はその竹刀を払いぎまに、数馬の小手へはりました。この多門の取つた小手は数馬の取つたのに比べますと、弱かつたようでございませう。少くとも数馬の取つたよりも見事だ

つたとは申されませぬ。しかしわたくしはその途端とたんに多門へ扇を挙げてしまいました。つまり最初の一本の勝は多門のものになったのでございませぬ。わたくしはしまったと思ひました。が、そう思う心の裏には、いや、行司ぎょうじは誤つては居らぬ、誤つて居ると思ふのは数馬に依怙えこのあるためだぞと囁くものがあるのでございませぬ。……」

「それからいかが致した？」

治修はるながはやや苦にがにがしげに、不相変あいかわらずちよつと口を噤つぶんだ三右衛門の話を催促さいそくした。

「二人はまたもとのように、竹刀の先をすり合せました。一番長い気合きあいのかけ合ひはの時だつたかと覚えて居ります。しかし数馬は相手の竹刀へ竹刀を触ふれたと思うが早いか、いきなり突つきを入れました。突はしたたかにはいりました。が、同時に多門の竹刀も数馬の面めんを打つたのでございませぬ。わたくしは相打ちあいうを伝えるために、まつ直に扇を挙げて居りました。しかしその時も相打ちではなかつたのかもわかりませぬ。あるいは先後せんごを定めるのに迷つて居つたのかもわかりませぬ。いや、突のはいつたのは面に竹刀を受けるよりも先だつたかもわかりませぬ。けれどもとにかく相打ちをした二人は四度目の睨み合ひへはいりました。すると今度もしかけたのは数馬からでございませぬ。数馬はもう一度突を入れしました。が、この時の数馬の竹刀は心もち先あがが上つて居りました。多門はその竹刀の

下を胴へ打ちこもうと致しました。それからかれこれ十合ばかりは互に鍔を削りました。しかし最後に入り身になった多門は数馬の面へ打ちこみました。………」

「その面は？」

「その面は見事にとられました。これだけは誰の目にも疑いのない多門の勝でございます。数馬はこの面を取られた後、だんだんあせりはじめました。わたくしはあせるのを見るにつけても、今度こそはぜひとも数馬へ扇を挙げたいと思えました。しかしそう思えば思うほど、実は扇を挙げることをためらうようになるのでございます。二人は今度もしばらくの後、七八合ばかり打ち合いました。その内に数馬はどう思ったか、多門へ体当りを試みました。どう思ったかと申しますのは日頃数馬は体当りなどは決して致さぬゆえでございます。わたくしははつと思えました。またはつと思つたのも当然のことでございまして。多門は体を開いたと思うと、見事にもう一度面を取りました。この最後の勝負ほど、呆気なかつたものはございませぬ。わたくしはどうとう三度とも多門へ扇を挙げてしまいました。——わたくしの依怙と申すのはこう云うことでございます。これは心の秤から見れば、云わば一毫を加えたほどの吊合いの狂いかもわかりませぬ。けれども数馬はこの依怙のために大事の試合を仕損じました。わたくしは数馬の怨んだのも、今はど

うやら不思議のない成行なりゆきだつたように思つて居ります。「

「じゃがそちの斬り払つた時に数馬と申すことを悟さとつたのは？」

「それははつきりとはわかりませぬ。しかし今考えますと、わたくしはどこか心の底に数馬に済まぬと申す気もちを持つて居つたかとも思ひます。それゆえたちまち狼藉ろうぜきものを数馬と悟つたかとも思ひます。」

「するとそちは数馬の最後を気の毒に思うて居るのじゃな？」

「さようでございます。且かつはまた先刻せんこくも申した通り、一かどの御用も勤まる侍にむぎと命を殞おとさせたのは、何よりも上かみへ対し奉り、申し訣わけのないことと思つて居ります。」

語り終つた三右衛門はいまさらのように頭かしらを垂れた。額ひたいには師走しわすの寒さと云うのに汗さえかすかに光つている。いつか機嫌きげんを直した治修はるながは大様おおように何度も領うなずいて見せた。

「好よい。好よい。そちの心底はわかつて居る。そちのしたことは悪いことかも知れぬ。しかしそれも詮せんないことじゃ。ただこの後のちは——」

治修は言葉を終らずに、ちらりと三右衛門さんえもんの顔を眺めた。

「そちは一太刀打ひとたちつた時に、数馬と申すことを知つたのじゃな。ではなぜ打ち果すのを控ひかえなかつたのじゃ？」

三右衛門は治修にこう問われると、昂然こうぜんと浅黒い顔を起した。その目にはまた前にあった、不敵な赫かがやきも宿っている。

「それは打ち果さずには置かれませぬ。三右衛門は御家来ではございます。とは云えまた侍でもございます。数馬を気の毒に思いましたも、狼藉者は気の毒には思いません。」

(大正十二年十二月)



## 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1999年1月10日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 三右衛門の罪

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>